

学生の積極性を引き出す授業の 試み

—自由研究などによる問題提起から プレゼンテーション能力開発への誘導—

三井 加寿恵

はじめに—気になる学生の消極的態度

短大生の一般的な傾向として授業の中での消極的な態度をあげることができ。問いかけられた質問について、自分から積極的に意見を述べようとしない、という態度である。指名されれば答えられても自らすすんで意見を言いたがらない学生がほとんどである。こちらからしきりと促してもあまり効果はなく、いつか誰かが答えるだろう、自分のところはとりあえずパス、という感じである。

授業中自分からすすんで意見を言ってみよう、と意識的に学生にアピールし続けているので、少しずつその効果は現れており、活発な声が聞かれるようになった。しかし、全体としてはまだまだ消極的な面が強い。

ふだんの様子をみると、友人同士の会話はいたって活発であり、教師と個人的に話すときも話題も豊富であり、話し方も屈託なく、明るく楽しい会話がはずむ。いうならば、カジュアルからセミフォーマルに変わると急に消極的になるようである。これは学生だけでなく私たち日本人に共通の引っ込み自案現象でもあろうが、国際化の現在なんとかその弱点も変えていく必要があると考える。

卒業後ほとんどの学生が入っていく職場において、さまざまな場で発言を求められたり、プロジェクトチームで意見を出し合う必要がでてくる。そうした場合、自分の意見をしっかり持ち、はっきりと発言をしていかないと、いつかその存在がかすんでくるのではないかと案じられる。他大学や専門学校の卒業生と同一線上で仕事をする職場で、その存在感が薄れ、仕事面でのリーダーシップも取れなくなるのではと案じるのである。

それ以前に、2年次での就職活動の場で、自分の考えや意見をしっかり表現

できるかどうかという大きなハードルがある。リストラやOA化の結果、日本の企業から事務職が消える、などと極言される昨今である。さらに女性の職場での活動の巾が広がり、補助的な仕事から責任ある仕事を任される時代になっている今、職場でも問題把握、問題提起、発言力などが強く求められるであろう。

自分の適性をどう生かしたいのか、あるいは相手企業の姿勢のどこに強い魅力を感じたのか、などその職場に対して強くアピールをして相手に訴え、自分を知ってもらう必要がある。その大切な場で焦点も自己表現もあいまいでは企業に魅力を感じてもらえないであろう。

こうした消極的な態度は、単に授業のみならず、日常の学生生活やさまざまな活動面にも現れており、学園祭などへの参加意識の低さは近年著しいものがある。これは若者意識の一般的な現象ではあろうけれど、本学のようにビジネス系の大学では将来を考慮し、とくに活性化が必要ではないかと思われる。

消極性の原因の考察

ところで、なぜ学生たちの態度がこのように消極的なのであろうか。授業中の質問に対して沈黙状態であったり、自分から積極的に意見を出さないのはなぜなのか。その理由を考察すると次のような問題点をあげることができよう。

- 1 まず第一に、単純に質問に対する答えが即座にはでてこないということ、時間が許せば答えられるのだが、という場合が考えられる。
- 2 問いかけに対して自分から答えて、もしも間違っていたら恥ずかしいという周囲への思惑が働く。最近の学生たちの傾向として、皆と同じであれば無難、自分だけあまり目だちたくないという意識が強いように思うが、人間関係のひずみを避けようとする一種の保身のあらわれとも受けとれる。
- 3 日本人特有の、よくいえば遠慮深い、悪くいえば消極的や傾向のあらわれ。
- 4 さらに、問題意識の稀薄さ、があげられよう。普段の学生生活の中で、自分から求めて知識を得ようとか、ある問題について調べてみようという知的探求心をあまり持たずに過ごしている。或いは強いて必要としない、つまり受け身の学習で事足りる、ということが考えられる。授業は“受ける”ものであって、講義の内容をノートに書き、テスト

に備えれば単位は取れるという“受け身の授業への慣れ”，も学生たちの消極性を助長しているのではないだろうか。

さて，ここで“受け身の授業への慣れ”というキーワードについて多少考えてみたい。なぜならこの問題は学生自身の問題ではあるが，多分に教える側つまり筆者の問題に関わってくるからである。この問題を考えるよりどころとして，本学の国際教養コース（Dクラス）の例を引いてみたい。

国際教養コースの学生が1年次最後の3か月間のアメリカ短期留学から帰国したときに見せる，あの生き生きとした表情，問いかけに対する積極的な返答ぶりは印象的である。どの学生もとても活発にアメリカでの学生生活について話してくれる。話をする内容も十分にあるし，なによりも問いかけに対して答える態度が自然で積極的なのである（この学生たちが2年次生になると，すっかり“日本の短大生”に戻って，帰国直後のあの生き生きした表情がやや薄れるのはいささか残念なのだが）。

筆者は帰国直後の学生たちに「アメリカで受けた教育と日本の教育の違いについて」というテーマでレポートを書いてもらうのだが，皆一様にアメリカの大学での先生たちのフランクな授業のやり方と日本での教壇からの一斉授業を対比させ，その違いをあげる。そしてアメリカでは毎日必ず先生に英語で質問されるので，答えることが身についたし先生たちと親しく交流できたと書く学生が多い。

アメリカでの授業が小人数のグループで行われ，おもに英会話の授業であるのに比べると，本学の授業がクラス制ではあるもののかなり人数的に多数であり，学生との理想的なコミュニケーションが可能な状態とはいえないことは考慮にいれなければならない。さらに本学の授業では講義科目は別として，かなりの教科において学生参加の演習面が強化されていることを学生や卒業生が高く評価していることも考慮にいれなければならない。

しかしやはり，学生の消極性の解明として，第5の原因，つまりわれわれ教員サイドの教授法にも一考を要するのではないと思われるのである。

学生の積極性を意図した「秘書実務演習」での授業方法

目標 以上述べたような考えから，筆者の担当する「秘書実務演習」では学生が興味をもって授業に参加し，生き生きと動き，授業の中で自分を表現し，互いに吸収しあえる，そんな授業を目指して授業の内容を組み立てている。

授業内容 「秘書実務演習」は2年次において行われ，1年次に学習した基本的知識を基に，その応用で構成される。授業内容は次に記すようにほとんど

の内容が学生主体のものである。

- * 電話応対・接遇のロールプレイ
- * メモの取り方・確認の仕方
- * 命令・指示の受け方と報告の仕方のロールプレイ
- * ケーススタディ
- * 上司の出張のスケジュールリング
- * 会議の企画・準備・運営の実際
- * グループ研究「働く女性のさまざまな問題」
- * 和食のマナー

以上の項目の中でグループでの作業は次の3項目において行われているので、以下それぞれについて順に述べてみたい。

- 1 上司の出張のスケジュールリング
- 2 会議の企画・準備・運営
- 3 グループ研究と発表

1 上司の出張のスケジュールリング

- a. 授業の内容と方法——2泊3日の出張の内容を示し上司の予定を詳しく説明した後、4~5名のグループに分け、机を寄せあって検討に入らせる。時刻表を各グループに2冊ずつ渡し、リアルタイムでスケジュールを作成させる。無理なく、無駄なくを心掛け、動きやすく効率のよいスケジュールとすること、またこの出張期間に3か所ほどで仕事をこなす設定としておき、列車、飛行機の両方を使用することなど事前に注意を与える。この作業で時刻表の見方にも慣れておけるように、実際の時刻表を使わせている。この課題では旅費の概算も作成するので、運賃表の見方も会得する。

出来上がったスケジュールは各自が1枚ずつワープロで仕上げ、旅費概算は印刷したフォームに記入し併せて提出させる。

- b. 授業の狙い——この学習においてなぜグループ作業を取り入れているかという点、グループで話し合い、さまざまな意見を出し合って一つの案にまとめていくことにより、仕事の能率を上げることができる、というメリットがあるからである。一人ではなかなか進まない作業も、皆で意見を出し合うことで到達度も早く、協調性も生じる。一方リーダーシップを発揮するよい機会でもある。

2 会議の企画・準備・運営

- a. 授業の内容と方法——会議のテーマを提示し、内容を設定する。会議は秘書学会（本年度からは日本ビジネス実務学会）のブロック研究会を本学が当番校として開催するという設定とし、人数は150名程度、基調講演、全体会、分科会、懇親会を含み、飲みものサービス付きとする。なお、時期は2月で、コートなどの預かり方法も問題として含むこととする。

仕事内容別に10グループに分け、1グループ4～5名で次の役割のどれかを分担させる。仕事の割り当てはくじ引きで決める。難易度にかかなりの差があるが、難しい役割が当たったグループは運が悪かったと諦めてもらい、それぞれ問題解決の検討に入る。

b. 作業内容

- 1 全体の仕事の流れを考え、一覧表またはフローチャートにわかりやすくまとめる。
- 2 基調講演担当——講演者の選考、打診、依頼、プロフィールとレジメの原稿依頼、当日の切符や車の手配、当日の接待、謝礼、後日の礼状発送など講演に関する一切を担当
- 3 プログラム作成、案内状の発送担当
- 4 資料・名簿などの作成担当
- 5 当日の受付担当——来客の受付、会費の受領などを担当
- 6 全体会会場担当——会場設営、準備、案内、記録などを担当
- 7 分科会担当——分科会の会場設営、案内などを担当
- 8 飲み物サービス担当——当日の気候などを考慮し適切な飲み物を考え、準備、設営を担当
- 9 クローク担当——雨の場合もあるので、傘・コートなどの預かり方を考える。
- 10 懇親会担当——会場の予約から移動のための車の手配、来客の誘導、会の司会・進行・あいさつなどの役割設定を担当

c. 発表方法

各グループ毎にまとめた内容を次の時間にクラスで発表させる。発表の内容はわかりやすく模造紙に書くかOHPを使って説明させる。

この場で指導者が問題点を指摘したり、他の学生に意見を言わせたりしてまとめていくので、グループの何名かは修正された部分をノートに記録する必要がある。

こうしてすべてのグループの発表が終了したときに、会議の準備段階から終了までの一連の流れを学生が理解している状態が望ましい。

d. 提出物——このあと各自が自分の担当した作業内容を修正加筆し、ワープロでまとめて提出、終了とする。

3 グループによる自由研究「働く女性のさまざまな問題」と発表

a. 研究発表の内容と方法

- ・ 4月最初の授業で研究と発表について詳しいオリエンテーションを行う。研究をやることの意図、方法について詳しく説明をし、納得してもらう。
- ・ 親しい仲間でのグループ作りをし、リーダーとサブリーダーを決め、メンバーの名前を書いて提出させる。この時点でくじ引きで発表の順番を決める。
- ・ その後、研究のテーマを検討させ、決まったら用紙に書いて提出してもらう。

b. 発表の回数と時期

- ・ 1クラス約54名を8グループに分け、前期2回、後期2回程度で終わるようにする。各授業で1グループ30分ずつ、2グループを予定する。
- ・ 発表の時期はおよそ5月末から10月末までとするが、2年次生は就職活動のため6～7月は欠席の学生が多いので、多少流動性を持たせる。

c. 発表方法

- ・ 準備した補助資料を黒板に貼り、グループで決めた司会役の合図で挨拶から始める。グループのメンバー全員が分担して発表を進める。
- ・ 発表の様子をビデオに収めておき、希望者は後で見ることができる。
- ・ 聞いている学生たちには発表内容をノートさせ、翌週感想文を提出させる（記名）。
- ・ この感想文を発表グループにフィードバックし、クラスメイトの感想や批評を読んでもらう。その中から各グループ10枚程度を選んでもらい、ワープロ打ちをさせ、クラス全体の感想文集を作ってクラス全員に配布する。

d. 学園祭での展示

- ・ 10月末までにすべての発表を終えたのち、11月中旬に行われる学園祭の展示用に、もう一度内容と資料を再編集する作業がある。授業の一端を展示して、外からの来客に見ていただき、感想なども自由に書いていただくのだが、来客の方々がこの展示に関心をもってくださるので大いに張り合いがある。
- ・ この展示資料は各グループ模造紙3枚分のスペースとし、イラストやグラフを使ってカラフルに仕上げる。ジューパン姿の学生たちは床に紙を広げて賑やかに作業に勤しむが、このときの学生たちはとても生き生きと楽しそうである。文字書きにイラスト書きに手分けをしてなかなか要領よく仕上げていく。学生の中にはイラストなどに素晴らしい才能を発揮する学生がおり、思いもよらぬ楽しい作品を作成してくれる。

e. 自由研究のテーマ

テーマを決めるに当たって、過去のテーマを参考にさせるが、あくまで自分たちの関心のあるもの、そして聞いている人にも十分興味を持たせ得る、話題性のあるテーマを選ぶように指導する。ちなみにこれまでに出されたテーマのうち、人気のあるものは次のようなものである。

- | | |
|--------------|---------------|
| * 女性と結婚 | * 再雇用制度 |
| * 女性管理職 | * 仕事に活かせる資格 |
| * ストレスとその解消法 | * 男女雇用機会均等法 |
| * 夫婦別姓 | * セクシャルハラスメント |
| * 仕事と健康 | * 育児休暇制度 |
| * 男女の役割観 | * 職場のマナー |

f. 研究と発表についての注意点

- 1 まずテーマの選び方と内容の切り込み方が研究の基本となるので、グループでしっかり検討すること。テーマは話題性があり、かつタイムリーなものであることが望ましい。
- 2 表やグラフを資料として使う場合は、できるだけ新しいデータを使うこと、出所を記入すること、古いデータは昨今のもものと比較するときのみ使うこと。
- 3 補助資料の文字の大きさを適切な大きさにすること。
- 4 なるべく外国との比較を試み、日本の場合の位置付けをすること。

- 5 発表時の態度，声の大きさ，話し方のスピード，姿勢などはとても大切なので，ビデオに撮っておき，後で自分たちで見すことを薦める。人前でのプレゼンテーションの格好の練習となるので，内容と共に最も大事なポイントである。
- 6 研究といってもすべてを手作りとはいかないので，本や新聞から材料をとり，それを基に構成するのだが，できるだけオリジナリティーのあるものを工夫して作るように指導する。中には寸劇を演じたりクラスのアンケート調査をしたり，働いている知人の職場を訪問してインタビューをさせていただき，お話をテープに録音してくるグループもある。また，自分達の母親の話を聞いたりしてレポートするグループも多く，母娘の話題が広がったと述べる学生も多い。身近にいる職場経験を持つお母さんたちの意見や感想には実感がこもっており，育児と仕事を頑張って続けた母親の若労を初めて聞いて，改めて感謝の気持ちをもつことができたと多くの学生が感想を述べている。

g. 自由研究に対する学生の感想から

- ・学年始めに自由研究の話を聞いたときは「面倒だなー」と思ったが，やってみると以外と興味が沸き，グループの協力もよく，遅くまで資料作りに大変だったが楽しかった，という感想が多い。こうした作業形態の授業は高校時代以来なので懐かしかったともいう。
- ・言葉では聞いていても，実際にどういうことか知らなかった知識を得てとても役にたったので，これからもこうした話題に関心を持つと思う。
- ・発表はとても緊張するが，終るとホッとし，「やった！」という気分になった。
- ・クラスの友人の考え方がよくわかり，クラスメートについて今まで知らなかった新しい発見があった。
- ・就職面接の際の話題にとっても役にたったし，聞かれたことにちゃんと対応できた。
- ・後輩たちにもこの自由研究をぜひ続けてほしい。

おおむね以上のような感想が多く聞かれた。始めは，イヤイヤながらの態度が見られる学生たちが，夕方暗くなるまで作業をしている姿をみると頑張っている姿勢に嬉しくなる。団結して作業に打ち込んだグループは，発表にもやはり良い結果がでるようである。

終りに

以上「秘書実務演習」の一部、とくに学生が参加し、自ら活動する部分についてまとめてみた。これら「出張のスケジュール作成」、「会議の企画・準備・運営」、「自由研究発表」の授業では学生が積極的に参加し、とても生き生きと素直に自分を出して活動している。案外仕事の進み方も速く、授業時間外での話し合いや作業時間が多くなるのだが、文句もいわず結構よく作業をこなしている姿勢は高く評価してよいと思われる。ちょうど就職活動と重なる時期はグループ全員が集まるのも思うにまかせず苦勞している状態がよくわかるので、もっともな理由があるときは発表を延期することもある。

作業や活動を通して学生の考えや性格も見えてくるし、教師とのコミュニケーションも細やかにできることは筆者がもっとも嬉しく感じるところである。

学生の消極性を嘆きつつ書き始めた接稿であるが、書き終えてみると、学生のもてる能力や人間性を引き出し、触れ合いながら授業を行うために工夫を凝らさなければならぬのは、どうやら教える側の問題であるような気がしている。本学の学生はおおむね明るく活発で前向きの素質をもっていると思うので、今後さらに学生の積極性を引き出すために新しい教授方法を研究し、さらなる活性化を計るつもりである。